湧水院釋尼衆悦（ゆうすいいん しゅうえつ）　村上悦美（えつみ）
略歴とお別れの前後

略歴

■昭和8年5月22日山口県豊北町滝部（現在下関市）西楽寺長女として生まれる。父中山司仙、母節枝、兄と弟二人の4人兄弟。

■女学校卒業後、貿易会社に勤務

■昭和31（1956）年、犀川本庄浄真寺、阿部正念氏の仲人により念信寺住職村上耕二と結婚

■同年12月長男匡一誕生

■宇都宮久遠洞氏主宰の「クロモジ」俳句会に参加

■藤平祐尚氏の導きにより深谷雄大氏主宰の「雪華（ゆきはな）」俳句会に参加

霊山の水のはじまり新樹光

水中花身じろぎ出来ぬ母看取る

s 35年頃、里の両親と

■平成元（1989）年6月、姑春枝命終。5年間、自宅で看取った。

■1990年代、五十代の頃、夫に随伴してハワイ、ロサンゼルスの東本願寺別院を訪問。転機になったらしい。

■2000年、匡一住職継職

■2005年、句集『真清水』出版

■平成23（2011）年11月、夫耕二命終

■平成27（2015）年2月義妹博子命終

病気の経過と命終

二年ほど前にかかりつけの病院で肝臓癌が約2センチあるということを知らされました。高齢でもあり、積極的に手術や抗がん剤治療をするより、そのまま様子をみようと本人とも相談のうえ方針を決めました。ところが、今年6月になって8センチになっていると知らされました。

それから自宅で訪問診療・看護を受けておりましたが、7月末よりまた急激に進行した模様で、食事も水分も摂取が難しくなり、体力が衰えてまいりました。

八月になりお寺はお盆のお参り、来客等で忙しく、母への細かな対応が難しくなるので、医療機関に8月1日より一時的に預かってもらうことにしました。次第に麻薬の量が増え眠っていることが多くなりました。

本人は行く末を心配する様子もなく、痛みをこぼすことなく、大変素直に関係者に身を委ねておりました。

覚悟のうえで一期一会の出会いを大切にしてきた人ですので、最後に立ち会えなくても今さら後悔することもないとは思いましたが、叔父や孫たちには生前中に会ってもらいました。

次第に下顎呼吸（かがく）になり、8月21日午前3時命終いたしました。

S30から40年代初、農繁期に託児所を

お通夜の前後

21日朝、帰坊。葬儀の写真を探しに暮らしていた隠居所へ行ってみました。ついでに納棺する際の着物も調べようと箪笥や棚をみると、なんと茶道具その他の見覚えのある品物がありました。庫裡からおそらく父が持って来たのでしょうが、それをまた母が整理していました。里の寺には骨董品が多くあったので、いかにも自然な振る舞いで母らしく思いました。

S42・6、得度

翌22日朝、前日見当たらなかった衣を庫裡の箪笥に探してみました。母の私物の入っている箪笥を初めて開けてみて、またびっくり。自分のものだけでない、父、私のもの、修繕必要なもの、修繕できないものなどの仕分けをして、帯、小物等も綺麗に整理されていました。

自分は里の母のしたとおりのことをしたのかもしれないとある時もらしたことがありましたが、それがどういうことなのかを実感しました。いわゆる女の仕事を本当によくしてきた人だなぁと。父も安心して外に出られたはずです。母の功績がどれほど大きかったことか。

門徒さんは母がよく自分たちのことを覚えていてくれたと、異口同音におっしゃる。何十年前のことを記憶していて、再会した時本人たちが忘れていたことを覚えているんだそうです。そういう人がこのお寺を守ってくれていたのだと思います。

たまに門徒さんからご隠居さんに元気にしてもらわんと困ると言われると、大変嬉しく感じました。それは門徒さんがお寺を温かみのある場所であるべきだとよく理解してくれていると思ったからです。

自分を主張して我を通すことはあまりなかったと思います。目立たず縁の下の力持ちに徹して、分け隔てなく人のために努（つと）めていました。心からお礼を言いたいです。

2011年11月前住職葬儀

密葬後

23日朝の密葬後、坊守が「お訣（わか）れに際し・悦美」のノートを発見。葬儀用の写真が挟まれ、院号法名、短歌などが記されていました。最近は俳句でなく、短歌ができると語っていました。辞世の句かも知れません。

お浄土へ

めでたくも真のいのちへ還りゆく

うからの御縁万物の縁

さらに

去りゆきし尚も現と固執せる

万物支援の不可視悲しく

老病ののちの巡りを死と言わず

如に迎えらるいのち新し

最後に

母は大切なものを残してくれました。子どもとしては悲しみというより生涯を尽くしてくれたという感謝があります。しかし私がその生涯に報いることができたのかという思いもあります。

有縁の皆様には心より御礼申上げ、今後ともお付き合いをお願いを申し上げてご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

お参りの日々

念信寺候補衆徒　村上宣（とおる）

今年もやっと暑い夏が終わり、札幌も少しづつ寒さを感じるようになってまいりました。

この時期になると、念信寺の境内には枯れ葉が多くなり、住職と前坊守に急かされて掃除を手伝い、時に怠けて叱られという日々を過ごしていました。もう急かされる声が一つ少なくなると思うと、夏の暑さが恋しくなるような一抹の寂しさがあるものです。

私は祖母である前坊守に大変可愛がってもらい、お寺に帰った暁には、少しでも恩返しができればと思っていましたが、それは遂に叶わずじまいとなってしまいました。

今は哀しみよりも寂しさを感じていますが、後悔なく別れを受け止められるのは、悦美祖母と多くを話し、語り合えたからだと思います。語ってくれた話を少しでも多く糧にしていきたいと思います。それが私が今できる見送るということかなと考えています。